

代表作時代小説

昭和37年度

代表作時代小説

昭和三十七年度

日本文芸家協会編

編纂委員

富田常雄
村上元三

尾崎秀樹
山岡莊八

武蔵野次郎

昭和三十七年度

代表作時代小説

四八〇円



昭和三十七年九月十日印刷
昭和三十七年九月十五日発行

編纂者 日本文芸家協会

発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社

東京都新宿区牛込弘方町一

振替口座・東京二一七五七

まえがき

この時代小説選集が東京文藝社から出版されるようになってから、すでに、これで八冊目である。その間、編集委員として、ずっとたずさわって来ているが、その年度ごとに新しい作家のものが収録され、新鮮度を加えて来たことが委員として何より嬉しかった。

もとより、編集であって、われわれは選者ではないのだから、幾つかのすぐれた作品を書いた作家にはその人に自選を依頼するようにした。是非と思う作品が枚数が多すぎて掲載出来ない場合もあった。又、出版社側の二、三の希望、たとえばページ数の限界、定価、とか言ったものにも考慮を払わなければならなかった。

歴史というものが改めて見直されて来た、この頃は時代小説に対する関心も高まって、売れ行きも上昇線をたどりつつある。委員とすれば、こういう事にも喜びを感じるのである。

それにしても、古い読者としての側に立って考えて見ると、時代小説も大きな進歩をしたものだと感じる。もはや、講談調を探そうにも見当たらなくなったし、内容も深くなった。これは読者としての私の感想だが、やがて、この選集も以前の出版社から数えれば十年余の星霜を閲している。その間、委員として仕事に加わって来た身としては、正に、時代小説も長足の進歩をしたものだという感慨を持たざるを得ない。

昭和三十七年八月

富田常雄

目 次

伊藤桂一	三三
稻垣一城	三三
池波正太郎	四五
井伏鱒二	三三
石川淳	八五
長谷川伸	九五
新田次郎	二三
海音寺潮五郎	三三
中山義秀	二五
中澤聖夫	二七
南條範夫	一九
村上元三	二三

村上元三

三三三

南條範夫

一九三

中澤 至夫

1434

中山義秀

一六五

海音寺潮五郎

III

新田次郎

113

長谷川伸

九五

石川淳

八五

井伏鱒二

四六

池波正太郎

四五

稻垣一城

III

伊藤桂一

七

おせん	と	沢庵	山岡	莊八	三九
菊屋	の	お菊	山手樹	一郎	三二
饒舌	り	過ぎ	山本	周五郎	二三
おち	よ	ろ丸	神坂	次郎	三五
大	夫	殿	司馬	遼太郎	三七
生	命	の	柴田	鍊三郎	三九
小	麦	さ	白石	一郎	三三
厚	田	日	子母澤	寛	三五
みず	わけ	の	杜山	悠	四二
城	記				

まえがき 富田 常雄
あとがき 武蔵野次郎

邯^{かん}

鄆^{たん}

鳴^な

く

夜^よ

伊

藤

桂

一

作者のことば

ほんとうの面白さを……

伊藤 藤桂 一

ぼくは時代小説を、ほとんど「講談倶楽部」にだけ書いてきた。ぼくに時代小説を書かせたのは、現在出版部にいる松井さんで、松井さんの移つたあと、斎藤さん、早川さんがそれをひきついで、いつのまにかぼくを、時代小説作家にしてしまつたのである。

ぼくの時代小説については「講談倶楽部」の編集部のほかには、真鍋元之、武蔵野次郎氏などが好意的に触れてくれただけで、世間的にはほとんど関心をもたれていない。あまり当世向ではないのだろう。尾崎秀樹君がぼくの時代小説を評して「技術もよく気品もあるが、その面白さは、まだほんとうの意味で大衆のなかに溶解してない」といつている。適切な言葉だが、作品を、作者の観念でなく、大衆そのものの興味のなかに活かし切ることは、これはじつさい容易なことではない。

時代物といつても、昔も今も、生きている人々の、人間感情にはさしたる変りはない。同じような喜怒哀楽があるだけだ。ぼくはだれかとだれかが触れあつたときに生じる、ささやかな感情の波紋、そこから生じるささや

かなできごと、それだけをストーリーとして、改まつた事件性のようなものを一応すててみようと思つた。「邯鄲鳴く夜」も、そのような意図のなかの作品のひとつである。

ぼくは必ずしも、これを時代小説の本道と考えているのではないけれど、少なくともここを通過していかなければ、かりにストーリーに重点をおく作品を書くにしても、味わいやふくらみに欠けてくるのではないか、と思つている。

ともかく時代小説には夢があり、書いていて楽しい。ぼくはこれからも、ぼくなりの時代小説の世界を、あまり急がず、構築していきたいと思つている。

著者略歴

東京都練馬区豊玉北一ノ一五

大正六年八月二十三日三重県生

世田谷中学卒

昭和十三〜二十年にわたり大陸に従軍

戦後主として出版編集業務に従事

主著「螢の河」(文藝春秋新社)「夏の鶯」(東

京文藝社)「花盗人」(講談社)

昭和三十七年「螢の河」で第四十六回の直木賞

受賞

日本文芸家協会々員

「あたしは美人じゃないけど、愛嬌があるつていわれるんです。そうみえますか？ どつちがいいのでしようか、ほんとのところ」

「両方揃つてると、いちばんいいね」

「両方は揃わないものなんですつて」

「そうかな。そうは思われないな。あんたをみてみると」
「まア、ちよつとの間に、お上手なことおつしやるようになつて」

——しばらくのあいだ、ふたりは黙つて耳を澄ました。座敷の外の暗がり、邯鄲が鳴きはじめたからである。その間に、小篠は、修助の盃に酒を満たした。修助はまるで飲めない。

「江戸のお屋敷では、毎年庭に邯鄲を放して、虫を聴く宴を催されるそうですね。風流な遊びではないでしようか」

「虫はどこにでもいるんだが、はるばる郷里から運ばれてきた——そう思つて聴くと、とくべつ身にしみて美しいのかもしれないな。——虫で、思い出したんだが」

「はい——」

「……………」

「なにをですか？」

「いや、つまらないことなんだ。どうも妙なことを思いついたものだ。どうかしている」

「あたしには、おつしやつて下さらないんですね」

「そういう訳じゃない。この次にね。そのとき話そう」

「さア、何でしょう？」

そこで小篠は、食台の上に、頬杖をついて考えるふりをする。ただ、ふりをしているだけだ。小篠は、このひととき、修助と、こうしていることを漫然と楽しんでいるのである。いまは、それだけで充分幸福だった。このひととき、こうしている時間が重なつてゆけば、いまに何かいいことがある、と素直に信じていた。二、三日前、町はずれの弁天宮にお詣りしたときのおみくじに、次のようにあつた。

第十八番 吉

暗を離れ明に出するとき

麻衣緑衣に變ず

それを思い出した。疑つてはならない、と自分にいいきかせる。でも、うつすらとした悲しみのようなものは胸のどこかにあるが、これは、人を恋するときには、誰だつてそうなるものなのだ。この方は真実あたしが好きなのかしら？ そんな眼もとで、小篠はふいと修助の様子をうかがうのだが、はつきりとは何もつかめない。

修助は小篠に対して、気持のよりどころのようなもの

を感じていた。この女と深くなると困つたことになる、いやなことが持ちあがる、と、自分の周囲にひどくわずらわしいものの立ち迷うのを知つていた。

が、その自分を引きずるようにして、なにかが、小篠に向けてまつすぐ、ひたむきに進んできているのだ。

小篠は、特に美しい女でもないが、心情があたたかだ。からだもだが、全体のかんじが、やさしく、ふつくらとしている。

気性もしつかりしたところがあつて、こんな商売をなぜしているのか、ふしぎに思えたりする。

「虫が、鳴きやんだようだね」

「あ、ほんと。メスがやつてきたのですわ。虫だつて、目的があるから鳴いているんです。人間の世界もそうです」

「おやおや、じゃ、おれたちもか？」

「ええ、あなたが、お鳴きになりさえすれば」

「鳴いてるつもりだがな。おれは」
修助の返事を、小篠は聞き洩らしたふうにうけたえず、何となし起つて窓際へ行き、障子をあげ、敷居に腰をかけた。

「もうお帰りにならないといけません。噂が立ちますから。噂つて、びつくりするくらい早いんです」

「おれはかまわない。この前話したことだけど、諦めず

やりとげる氣になつてきた」

「あたしは、おすすめできません」

小篠は、同じく立つて近づいてくる修助を、情のこもつた眼で迎え、立ちあがり、うしろ手に障子を閉めた。

別なところで、また、別な虫が鳴きはじめた。

「あんたも、よく考えておいてほしい。どうしても、おれは、実行するつもりだから」

修助は、小篠の肩に手をかけることさえしなかつた。

小篠は修助について廊下を送つて行くとき、かすかに、身うちのふるえる想いがした。いつもだが、男の情の激しさと清潔さにうたれたからである。

二

江戸へ四十余里、甲州街道沿いの小さな城下町で、小篠がその料亭へ住み込んでから、足かけ三年になつていた。とりたてて、悲しいことも楽しいこともなかつたが、ふいに、大きな波をかぶるように、修助との出来事にぶつかつた訳である。

十人ばかりいる仲間の女たちのなかで、今度のことでは、小雪というのがいちばん親身に、相談にのつてくれた。店の女たちはみんな、小艶、小笹、小菊、小千代、小芳などと風変わりな名がついている。ここでは、客が望めば、一緒に寝てやらねばならなかつた。といつて

それが表向きでもなく、客がなければ女中部屋で寝る。その夜は、小雪と並んで寝ながら、寝つかれず、小篠は何度も寝返りを打った。

「話したら？　それで気が紛れて、落ちつくかもしれないわ」

ひつそりと、小雪が声をかけてくる。ほかの女たちは客をとつていて、その部屋には、ふたりきりしかいなかった。

「別に話すつてこともないのよ。ただ、どうしても、自分の考え通り進むつていつてるの」

「進ませるといいわ。まずく行つたつて、もともとじやない」

「あんなひととは思わなかつた。はじめから、それと知つてたら、そつとしとくんだった。火をつけた責任はあたしにあるのかな」

「いよいよとなると、むつかしい問題も出てくるんだらうね」

「そりやアね。考えてもごらん。あたしたち、宿場女郎を少しばかり上品にした位だもの。相手がお武家の、色恋の沙汰では、この町ではうるさく騒がれちまうわ。あたしはかまわない。でも、あのひとは辛い破目になる。それでも押し切るつて、いつてるんだだけど」

「いままでに、何度逢つた？」

「今夜で、五度目」

「それで、抱きもしないの？」

それには、声には出さず、ふとんの襟でうなずいてみせる。気配で、小雪にもそれとわかつたのだらう。ききとれるくらい、ためいきをして、いつた。

「どつちも、まどろっこしいね。あたしだつたら、思いつきり飛び込んじまう。行くところまで行くよ。あんなも、そうしな」

「ええ。だんだん足元が浮いて、そうなつてしまひそう」

しばらく前、この料亭で、江戸詰になる者の送別の宴席があり、修助も、末座に加わつていた。修助は無理に酒を強いられたとみえて、廁へ立つた歸りに、足がもつれて不覚に縁から落ちた。ちやうど銚子を運んでいた小篠が、介抱して別間へ運び、寢がはねてから行つてみると、修助はぐつすりと眠り込んでいた。

小篠は商売だから、男がどんな氣立ての者だか、たいがいひと目でわかる。同じ床へもぐり込んで、朝まで寝た。修助は、目をさますとびつくりして、あわてて起きあがり、身支度をし直した。

「お歸りになるの？　このまま」

寝たまま、多少はいぶかるような眼で、小篠はきいたものだつた。自分になんの関心も示さないのがふしぎだつた。掛布団の中で、からだは触れていた筈だが、修助

は「しまった、何ということだろう」と、小篠をみて笑つたきりである。

「ゆうべのことは、内緒にしておいてくれないか。でないと笑いのものにされる。どうして庭へなんか落ちたのだろう」

子供つぼく、小首をかしげるのがおかしかつた。急いで起きて、小篠も、修助の身支度を手伝つてやつた。

「ありがとう。帰らせて貰う」

といつて、さつさと帰りかけるとき、あり来りの挨拶の意味とは違つて、

「また来てくださいますか。このままだと寂しいですから」

と小篠はいつた。ごく自然にその言葉が出た。修助は立ちどまり振り返ると、いくらか哀願をこめでもしたような小篠の眼を、しばらくみつめてからいつた。

「そうだな。きつとくる。お礼にね」

三

それから十日あまり経つた。やつぱり来てくれないのだな、と、何となくあきらめかかるころに、ふいと修助が顔をみせた。

「何度も、この家の前までは来たんだが、どうも、誰かにみつきりそうな気がしていけなかつた。引返したんだ

よ」

修助は、ふたりきりの部屋でさし対うと、気弱そうに言訳をして、ほつとした顔色になつた。

「なぜ、みつかるといけないのですか。なにも、悪いことをしてる訳じゃないでしょう」

「それはそうだが、うるさいんだ。おれは藩では、いてもいなくてもいい輕輩で、誰からも疎んじられている。あいつが女に夢中で料亭通いをしている、ということになれば、大喜びで話の種にされてしまうんだ」

「このあいだ、一緒にいらした方たちもですか」

「うん。もしおれが、身分がいいか、立派か、それとも腕が強ければいいんだがな。仕方がないさ」

修助は、藩で、勘定方の下役をやつてゐるといつた。

次男坊で、お情けで仕事を与えられているので、日蔭者みたいに勤めてゐるらしかつた。どうかするとそれを、小篠にうつたえるような口ぶりにもなつたのは、小篠をただの料亭の女とはみていない、別な感情の現われだつたに違いない。

その次も、またその次のときも、十日ほど日を置いては、修助は小篠のところへ遊びにきた。申し訳ほど酒を飲み食事をし、世間話をして、あまり遅くならずに帰つて行く。ただ逢つてゐるだけでも楽しみ、といった様子なのだ。ほかの男たちとは全く肌ざわりが違つていて、

はじめは途惑つたが、馴れるにつれて呑みこみやすくなり、小篠も、応対のコツを心得てきた。

「あなたをみると、何だか、お待たしくありませんかね。いつそ、おやめになつたら？」

「自分でもそう思つてる。あんたと逢つたとき、ふいと、その気が強くなつたんだ。ずつと考えてる」

でも、それが冗談か本気か、小篠にはつかみどころがない。黙つて、笑ひすごしてしまふより仕方がなかつた。

「浪人してゐたつて、生きてくぐらいのことはできる。

いまのうつとうしい世界からは、どうしても逃げ出したんだ。それでだが、もしもそうなつたら、おれと一緒に江戸へ出てくれるか？」

「あなたさえその気なら、どこまででもついて行きます。江戸に多少の身寄りもあり、当座は困りません。あたし、こんなに落ちぶれてますけど、常磐津だつたら、人に教えられないこともないんです。あなたおひとりぐらい、遊んでゐたつて大丈夫です」

「まさか、遊んでもいいさ」

うけ答えはしていても、修助の口のきき方が、大人身の上相談をしているとも思えないまことに淡々としたもののなので、別にそのことを思いつめてゐるのだとは思わなかつた。だいいち修助には、女を誘惑するとか溺れるとかいつた氣ぶりが少しもない。一緒に寝てゐたとき

でさえああなのだから。この話がどつちへ転ぶにしても、いつかこのひとの前で、一枚一枚着てるものみんな脱いで、どうしても抱かれてやろうと、妙な意気込みを小篠はかんじたまのたつた。修助が帰つたあとで、それを考えるひとりでおかしかつた。

小雪にも、その話をした。

「それで、小篠ちゃんと一緒にいる気があるの？」

「ある。ときどき、とてもイライラしてしまふ」

「あせつたつてダメさ。そういう人なんだから。あたしたちはめつたにまともな氣持の男とはつきあえないからね。素直にならないといけない。そういう人はほんとにやる気があるから、あまり口には出さないのよ」

そういうものなのか、と、小篠の胸に、修助の影は深く住みついたようだ。そしてそのつぎ、ふたりで邯鄲の話をして別れた夜からは、さらにいつそうその想いが深まつた。

ところが、それからまもなくのこと、日暮れ方早く、みなりは質素だが品のいい落ちついた婦人が来て、座敷に小篠を呼んだ。

「私、修助の母ですが」

といわれたとき、小篠はさすがに身の凍るおもいで、返事にまつた。自分とのことが洩れて、きつと責められるに違いない、と思つたからである。

四

修助はいつたい、ふたりのことをどう話したのだろう、それが小篠にはいちばん気になった。まさかこう早く修助の身内と逢う破目になろうとは考えてもみなかったので、気が重くてならなかった。どつちみち、いい立場に置かれる訳がない。だがふしぎに心の隅で、何といわれても卑屈にはなるまい、という激しいものだけは燃えていた。それを失つたら、みじめで泣けて来そうな気がしていた。

「修助から、いろいろとききました。家を出て、江戸に出て暮したい、といっているのです。あなたにも、そんなことをしていましたか？」

「はい。私がすすめたのです。お侍には向かない、といつて」

「そうですか。あなたと一緒になる筈とか。氣立てのいい、あたたかい感じのひとつと、ひどくほめていました。それで一度、逢つておきたかつたのです」

「いま、ごらんになつてゐるだけの女です。なんのとリエもありません。羞かしくて、奥様にお目にかかれるような女ではないのです」

「修助は、少し変り者で、ひとときあいのいい方ではありません。それで、今度の話をきいてびつくりしまし

た。まさか、と思つたのです」

「私が、そのかしたものと、きつとお思いだつたでしょう。事実それに違ひはございませんけれど」

「江戸へ出れば、暮して行けると、單純に思つてゐるようです。親の身として、それなら好きなようになさい、とはいへません。できれば、あなたとの仲を割いて、養子口のない訳ではないのですから、どこかへ話をきめたいのです」

「お氣持はよくわかります。当然のことですから」

「修助は、またあなたに逢いにくると思ひますが、どうなさいますか？」

「はあ。そのときになつてみませんと、私にもわかりません。でも、その場合は、たぶん奥様のお言葉を裏切るようになつてしまひそうです。申し訳ないことですけど」

「正直ですね、あなたは」

おつとりと、遠く小篠を睨んで觀察してゐるような言葉なので、小篠はかえつて氣味が悪く、じつとりと汗ばんでゐた。少しの邪魔が入つてさへ、修助との仲はもろくこわれる、という氣がしてゐた。返事にこまかく氣を遣ひ、ロクに修助の母を見なかつたが、ふいと心がきまつてきた。卑屈にならずまつすぐに立つていよう、と思ひながらも、やはりうじうじとしてしまつてゐる自分の姿の、みじめさがみえてきたのだ。それを振り切るよう